理論と論説

薏苡仁の治療処方

小山 誠次

Kampo Formulas Containing Coicis Semen that are
Effective in the Treatment of Verrucae

Seiji KOYAMA

M. D., Fushimi Clinic, 3-318 Ginza-cho, Fushimi-ku, Kyoto-shi, Kyoto 612, Japan

Abstract Coicis Semen was known in ancient times as a medicine promoting longevity. In the 'Huang ti nei ching su wên', there is a reference to Coicis Semen in a description of one of the pulses (cardiac pulse without stomachic energy), and it is contained in four formulas in the 'Chin kuei yao lueh'. As for the effectiveness of Coicis Semen for the treatment of verrucae, there are no references in the 'Ben cao gang mu' or the 'Nodoku'. In the Edo period, a common treatment for warts was moxibustion. The first text thought to mention Coicis Semen for the treatment of verrucae was the 'Yamato Honzo'. However, it is difficult to tell from the description of the condition whether it is in fact warts or not. Previously, the references contained in the later texts, 'Matsukageidan' and 'Seinosatan', containing a verruca formula (Chiyushimpo), have been considered to be the earliest notations of applying formulas containing Coicis Semen for the treatment of warts. However, independent investigation revealed the presence of a formula for verrucae in the text 'Meikahosen', compiled by Yamada Genrin twenty years before the 'Seinosatan'. The description in the 'Meikahosen' says 'Formula for warts: Coicis Semen-3 sen; Glycyrrhizae Radix-1 bu to be used not only internally but externally as well.'

The realization of the ability of Coicis Semen to cure warts was thought to have occurred with the observation of many cases of remarkable effectiveness seen when large quantities were consumed in the form of rice and gruel containing Coicis Semen, rather than in the form of sweets made from what was called 'Chosenmugi' or *Coix lacryma-jobi* L. var. *koreana*.

Key words: Coicis Semen, formulas effective for verrucae, 'Seinosatan', 'Meikahosen', Coicis Semen gruel.

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 47, 63-69, 1996

(accepted 28 Dec, 1995)

緒言

薏苡仁はハトムギ *Coix lacryma-jobi* L. var. *ma-yuen* STAPP の種子で、薬用には包鞘付きの

まま、あるいは脱穀して精白したもの、あるいは更に粉末化して用いられる。

薏苡仁の形態は同属のジュズダマ *Coix lacryma-jobi* L. に似て、『黄帝内経素問』¹⁾ 第

医、伏見診療所、京都、〒612 伏見区銀座町3-318

〔1995年12月28日受理〕

六巻・玉機真蔵論篇第十九に、「真心脉至堅而搏如循薏苡子累累然色赤黒不沢毛折乃死(原文訓読: 真心ノ脉ノ至ルコト堅ニシテ搏チ薏苡子ヲ循ルガ如ク累累然トシテ色赤黒ニシテ沢カラズ毛折テ乃チ死ス)」とあって、堅くてコロコロしている様子を伝えている。

処方としては『金匱要略』⁹⁾ 卷之上・痿湿喝病脉証治第二に、「病者一身尽疼，発熱日晡所劇者，名風湿，此病，傷於汗出当風，或久傷取冷所致也，可与麻黄杏仁薏苡甘草湯」とあり，肺痿肺癰欬嗽上気病脉証治第七に，「千金葦茎湯，治欬有微熱，煩滿，胸中甲錯，是為肺癰」とあり，胸痺心痛短気病脉証治第九に，「胸痺緩急者，薏苡附子散主之」とあって，更に卷之中・瘡癰腸癰浸淫病脉証并治第十八には，「腸癰之為病，其身甲錯，腹皮急，按之濡如腫状，腹無積聚，身無熱，脉数，此為腸内有癰膿，薏苡附子敗醬散主之」とある。これらは薏苡仁が往古より生薬として用いられて来た歴史を物語っている。

今回，往古より用いられて来た効能を踏まえた上で，治疣作用に関して過去の文献的記載を改めて検討した。

本 論

Ⅰ 薏苡仁の効能

薏苡仁の効能については、『本草綱目』⁹⁾ 第二十三巻・薏苡仁の項に，「主筋急拘攣不可屈伸久風湿痺下気久服輕身益氣。本經。除筋骨中邪氣不仁利腸胃消水腫令人能食。別錄。炊飯作麪食主不饑温氣煮飲止消渴殺虵蟲。藏器。治肺痿肺氣積膿血欬涕唾上気煎服破毒腫。甄權。去乾湿脚氣大驗。孟詵。健脾益胃補肺清熱去風勝湿炊飯食治冷氣煎飲利小便熱淋。時珍」とあって，「神農本草經」では上薬に分類され，輕身益氣，不老延年の薬だったことを物語っている。いずれにしても治疣作用は記載されていない。

また、『能毒』⁴⁾ 上・薏^{モイ}の項に，「筋急ニ拘攣ニ能進食下気乾湿脚氣ニ虫ニ 因寒筋急ニハ中焦極冷ニハ薏苡仁也性微寒也。筋急拘攣此薏苡ハ筋ノ攣ニ使薬ゾ拘ハカムハル攣ハヒキツル也。能進食トハ脾胃ノ熱故ノ不食ニ也ヒヘタニハ惡シ。乾湿

脚氣トハ乾^{ホソル}也脚氣ニハ^{湿ハルル}也^{当帰地黄ト使也}防已羌活ト使也」とあって，やはり治疣作用は記載されていない。

更に、『妙薬单方』⁹⁾ には薏苡仁の咽喉腫痛に対する効能は記載されているが，治疣作用については同様に触れられていない。この『妙薬单方』の用法は，『外台秘要方』⁹⁾ 卷第二十三・咽喉腫方五首から引用したものであろう。

Ⅱ 治疣療法

一方，疣贅の治療法としては，『外科枢要』⁹⁾ 三・疣の項に，「疣属肝胆少陽經風熱血燥或怒動肝火或肝客淫氣所致蓋肝熱水涸腎氣不榮故精亡而筋攣也宜以地黄丸滋腎水以生肝血為善若用蛛絲纏螳螂蝕著艾灸必多致誤大抵此症与血燥結核相同故外用腐蝕等法内服燥血消毒則精血愈虛肝筋受傷瘡口翻突開張卒成敗症(筆者訓読: 疣ハ肝胆少陽經ノ風熱血燥ニ属ス或ハ怒リ肝火ヲ動ジ或ハ肝淫氣ヲ客シテ致ス所ナリ蓋シ肝熱スレバ水涸レ腎氣榮エザル故ニ精亡クナリテ筋攣キツル也宜シク地黄丸ヲ以テ腎水ヲ滋シ肝血ヲ生ズルヲ以テ善シト為スベシ若シ蛛絲纏螳螂蝕著シキヲ用テ艾灸スレバ必ズ多ク誤リヲ致ス大抵此症血燥ノ結核ト相同ジ故ニ外腐蝕等ノ法ヲ用ヒ内燥血消毒ヲ服スレバ則チ精血愈々虚シ肝筋傷ヲ受ケ瘡口翻リ突キデテ開張シ卒ニ敗症ト成ル)」とあって，地黄丸を以って腎水を滋し，肝血を生じさせる治療法を指示し，むやみやたらに艾灸療法を用いないよういさめている。

しかし，江戸初期の『病名集解』⁹⁾ 卷之六には，「疣瘡 俗ニ云イボナリ……宜ク初テ起ルモノニ艾灸スレバ余ハ皆落ツ神効アリ又朮ト云リ」とあって，こちらは逆に疣贅に対する艾灸療法を推奨している。なお，艾灸療法は今日でもよく行われている。

Ⅲ 『大和本草』

さて，一般には薏苡仁の治疣作用を最初に記載した文献は『大和本草』であるとされている。

『大和本草』⁹⁾ 卷之四・薏苡仁の項には，「……○湿ニ中リテ面ニ小瘡出テ恰如癩ニ薏苡仁ヲ煎服ス有効此方本草ニ不載居家必用ニ云其苗堪為薪○今案ニ子ヲ取テ食トシ葉トシ葉ヲ煎シテノム其茎ヲ薪トシ籬トスヘシ其根ハ去虵蟲治牙痛亦堪為薬

可謂益人多」とある。「湿ニ中リテ」は発症契機を述べたものであり、「面ニ小瘡出テ恰如癩」が顔面の多発性疣贅を述べたものと解釈されている。

しかし、「面ニ小瘡出テ恰如癩」だけではこの病変が疣贅であるのかどうか判断し得ない。当時既に、イボ、疣、疣、疣瘡、瘰癧等の用語はよく知られていたはずであり、疣贅であれば、なぜこれらの用語を用いなかったかか疑念を抱かざるを得ないからである。ただ結果的には薏苡仁の煎服が有効であったような病変であることは間違いないだろう。

むしろ逆に、当時既に薏苡仁の外湿、内湿に対する効能は周知されていたことから、「面ニ小瘡出テ恰如癩」に対する薏苡仁の有効性を外湿環境と関連付けたのであろう。そのため、外湿に対する本治療法を行なうことにより、「面ニ小瘡出テ恰如癩」に対する標治療法も奏功したと判断したのではないだろうか。この点は考按でも検討する。

Ⅳ 『大和本草』以後

『大和本草』以後の治療法と薏苡仁の用途について検討する。

『大和本草』刊の4年後に『和漢三才図会』が発刊された。『和漢三才図会』¹⁰⁾ 巻第十・人倫之用には、「疣……疣同 和名以比保……釈名云疣丘也出皮上聚高如地之有丘也 △疣黒子共有二種大如小豆而肌色高起一種如茄実匾不起並有母疣生数子也以薬及灸治其母則悉治或用胡麻花類摺之或用生茄子肉摺亦佳(原文訓読:疣……疣同ジ和名ハ以比保……釈名ニ云フ疣ハ丘也皮ノ上ニ出テ聚リテ高ク地ノ丘有ルガ如シ △疣ズルニ疣黒子共ニ二種有リ大キサ小豆ノ如ニシテ肌色高ク起ル一種ハ茄実ノ如ク匾ク起ラズ並ニ母疣有リテ数子ヲ生ズ薬及ビ灸ヲ以テ其母ヲ治スレバ悉ク治ス或ハ胡麻ノ花ヲ用ヒテ頻リニ之ヲ摺ル或ハ生茄子ノ肉ヲ用ヒテ摺ルモ亦佳シ)」とあるが、「以薬及灸」の薬が何を指すのか不明である。

また更に、その2年後に発刊された『合類広益靈宝薬性能毒大成』¹¹⁾を始め、『巻懐食鏡』¹²⁾、『用薬須知』¹³⁾、『薬籠本草』¹⁴⁾、『一本堂薬選』¹⁵⁾、『薬徴』¹⁶⁾等々にはいずれも薏苡仁の記載はある

ものの、治疣作用は記されていない。

ただ『用薬須知』¹³⁾巻之二・草部において、「薏苡仁 三種アリ和名唐麦ト云モノ真ナリ皮ヤワラカニシテ色白肉厚ク粒大ナルモノ野生ノモノハ皆非真其名川穀トモ^{カンジュ}贛珠トモ云フ念珠ニ作テ小児ノ翫戯トス。下品ナリ乏キ時ハ可通用」とあり、他書が2種に分類しているのに、自信に満ちた文勢で3種に分類しているのは特異である。

歴史的にジュズダマ属の分類については、『ハトムギの効用』¹⁷⁾・第5章 日本におけるジュズダマ属の歴史に詳述されているが、最も多い場合は5種に分類されたこともあったと述べ、これは不当である旨、記されている。この意味からすれば、「神農本草経」を始め、『黄帝内経 素問』、『金匱要略』等に記載されている薏苡仁の基源植物が何であるかは推測の域を出ないと言わざるを得ない。

疣贅の治療法としてはその他に、『医療手引草』¹⁸⁾別録下・外科の諸瘡の項に、「瘰癧の拔薬 天南星ヲ末シ米ノ酢ニテトキ貼ル 又方 イワシ草ノ汁ヲ貼クベシ○イワシ草ハ田ノ中ニアリー一寸ホドノ長サナリ薬ハ莖葉ノ如キモノナリ」の記載がある。

一般的に民間薬による疣贅の治療薬として『漢方と民間薬百科』¹⁹⁾に、アオギリ、アカザ、イチジク、エビズル、クサノオウ、コンニャク、スベリヒユ、ソクズ、タンポポ、テンナンショウ、ナス、ナメクジ、ハトムギ、ホオズキ等々が記載されていて、今日でも民間薬的には利用されている。

Ⅴ 『青囊瑣探』

さて、『大和本草』では薏苡仁を用いた病変が記述的に明確でないことは既に述べたが、文献上、薏苡仁の治療作用として明確に記載された最初のものが『増訂和漢薬考』²⁰⁾に記載されている。そこでは寺尾国平が『臨床薬石新報』²¹⁾第一巻第十一号に発表した論文「薏苡仁の治療作用」を引用して、『青囊瑣探』とある。また『ハトムギの効用』²²⁾では『松蔭医談』、『青囊瑣探』とあり、ヨクイニンエキス錠(散)を薬価収載している小太郎漢方製薬の MEDICAL INFORMATION

写真1

にも『青囊瑣探』とある。特に『青囊瑣探』²³⁾ 下巻には有名な治疣神方の一項が設けられており、薏苡仁の治疣処方『青囊瑣探』をもって嚆矢となすと考えられて来た。

先ず『松蔭医談』²⁴⁾ には、「いほの多く出たるに、薏苡子をあたふれば、しるしあり、肩ひぢのいたみ、なべてのふき出ものにも、これを、もちひて、しるしありといふことは、たしかに、こゝろみ得たるゆへ、いくその人に、かたりぬれど、あまりに無味なるものゆへにや、うけかはぬ、人おほし」とある。これは確かに疣贅に対して薏苡仁を投与したとの記載であり、『大和本草』と異なり、明確な記述である。

次に、『青囊瑣探』²³⁾ 下巻・治疣神方には、「疣雖是小恙，至其蔓延，則雖容顏如毛嬙西施，亦有其類醜（言極醜）似無塩女子焉，是以録經驗數方，使閭中患之者得歡心矣。治疣神方，屢試驗，蛇蛻不以多少，滾湯浸頻浣患處，則瘳○又方，治疣蔓延者，以活蛻蟬一箇，輕擦疣母上，着粘訖乃放棄，則其疣自脫，其他子疣尋愈○又方，薏苡仁二錢，甘草一錢，以水一盞半，煎取一盞溫服，四

五日而疣如私，（一方無甘草，用大腹皮亦妙，）○又方，將茯苓三錢，水煎溫服，數日而自痊」とある。この記載は薏苡仁による最初の治疣処方とされて来た。なお、蛇蛻は蛇の脱殻のことであり、活蛻蟬は生きたなめくじのことである。

『松蔭医談』は寛政元年（1789）の序文があり、寛政十一年（1799）に刊行された。また『青囊瑣探』には享和元年（1801）の序文がある。

Ⅵ 『名家方選』

しかしながら、今回独自の調査によって、山田元倫撰『名家方選』²⁵⁾・瘡腫病の雜瘡に、「治疣方 薏苡三錢甘草一分 右二味水煎或以二味敷患處」との記載を見出した。これは内服のみならず外用の用法をも記したものである。ここにその記載箇所を写真1として供覧する。

『名家方選』は安永九年（1780）の序文があり、翌天明元年（1781）の刊行である。それ故、『青囊瑣探』よりも20年早く刊行されているので、治疣処方の歴史は20年遡及することになる。正に『名家方選』をもって治疣処方の嚆矢たりうることになる。

考 按

薏苡仁の治疣作用は、ではどのようにして発見されたのであろうか。

『原色和漢薬図鑑』²⁶⁾ (上)・薏苡仁 川穀の項では、ジュズダマ属植物はハトムギとジュズダマの2種が記されている。しかし『ハトムギの効用』¹⁷⁾では、明治以前の我が国のジュズダマ属植物を文献学的に4種に分け、今日のハトムギを、a) シコクムギ、トウムギと、b) チョウセンムギに分類し、今日のジュズダマを、c) ジュズダマと、d) オニジュズダマに分類している。

食用種に限ると、a) シコクムギ、トウムギは『本草綱目啓蒙』²⁷⁾ 卷之十九・穀之二の薏苡仁の項に、「真ノ薏苡ハ享保年中ニ渡ル」とあるので、少なくとも『大和本草』、『和漢三才図会』以後渡来したことになり、また渡来後、『名家方選』まではほぼ50年間の期間があることになる。なお、『本草綱目啓蒙』²⁷⁾の同箇所には、「一種トウムギ、一名朝鮮ムギ」とあって、b) チョウセンムギと同一植物としてトウムギを充てている。このb) チョウセンムギは、『ハトムギの効用』¹⁷⁾によれば、「加藤清正が、朝鮮から持ち帰ったものと推察する」とあるので、少なくとも江戸初期には知られていたことになる。また「トウムギとチョウセンムギは、きわめて近似の植物である」ため、「ハトムギは、食用種2種を総括した名称であることは、明治10年代の文献によってあきらかである」ことにもなる。

そこで、元禄十年初版の『農業全書』²⁸⁾ 卷之二・五穀之類の薏苡第十九には、「……実は薏苡仁と云葉種なり。性のよき物なり。病人の食物に調て用ゆべし。粥になり。飯に交へ。だんごにしたゝめ。様々料理多し。……」とあり、更に『和漢三才図会』²⁹⁾ 卷第百三・穀類の薏苡仁の項には、「……或炊飯食気味如麦飯或粗末同粳米煮粥食共有益 (原文訓読：……或ハ飯ニ炊テ食フ気味麦飯ノ如シ或ハ粗ク末ニシテ粳米ト同ク粥ニ煮テ食フ共ニ益有り)」とあるので、このb) チョウセンムギが食用として利用されて来たものと思われる。

更には、寛永二十年に成書した『料理物語』³⁰⁾・第十八 菓子部には、「おこし米 よくいんにをよくほし。引わり米のごとくにしてきつね色にいり。さてさとうに水をくはへふかせ。にえ候時かさにすこしづゝさたうをとりわけ。よくいをすこしづゝ入ませ。盆へあげ候へば。かたまり候がよきかげんなり。いくたびにもかさにとりわけつかまつりてよし。道明寺にてもいたし候」、及び「近衛様雪餅 白朮。二両。茯苓。一両。山薬。二両。蓮肉。二両。よくいにん。二両。右よくこにしてうるの米四分。もち六分の粉に合すり。さたう八両。右何もよくかきあはせ。つねのことく布をしき。むし候てきり出し候也。無比類也」とあって、薏苡仁が菓子としても利用されていたことを表わしている。この薏苡仁も上記の事情により恐らく、b) チョウセンムギであろうと思われる。

このように、薏苡仁は一方では粥などの食料として、また一方では菓子の材料として食用に供されていた。

ここでもし、疣贅に罹患した人が薏苡飯や薏苡粥として摂取すればどうなるであろうか。また実際そうであったように、特に飢饉に際して他に摂食するものが乏しければ、非常に治疣的に奏効したであろう。これは容易に想像しえる。

『本草衍義補遺』³¹⁾の薏苡仁の項にも、「……凡用之須倍於他薬、此物力勢和緩、須倍用即見効。……」とある。すなわち、菓子類に含有される程度の分量では治疣効果の点で明白でなくとも、薏苡飯や薏苡粥ともなればはるかに大量に摂取することになり、今日でいう著効例を多数経験することになったはずである。そしてこれらの貴重な経験を踏まえて、『名家方選』の治疣方となったのであろう。同様に『大和本草』の記載においても、薏苡仁によって治癒したという事実が先にあり、その理由付けとして当時既によく知られていた湿に対する効能を引き出し、「湿ニ中リテ」となったのではないかと思われる。

以上の大量摂取と軌を一にして、筆者もヨクイニンエキス錠 (散) を処方するときには、以前から可及的多量投与を心がけている。

最後に、『世医得効方』³²⁾ 卷第四・大方脉雑医科 諸痺には、「薏苡粥治久風濕痺。補正氣。除胸中邪氣。利腸胃。消水腫。久服輕身益氣。薏苡仁一升為末。以水作粥。空心服」とあるが、残念ながら中国では薏苡仁の治疣作用は発見されなかった。

以上をまとめると、食用種であるチョウセンムギが加藤清正によって持ち帰られ、一方では粥などの食料として、また一方では菓子材料として食用に供されていた。特に薏苡飯や薏苡粥では大量に薏苡仁を摂取することになるので、疣贅に罹患した人が摂食すれば著効例を多々経験したはずである。これらの貴重な経験を累積し、『名家方選』の治疣方となったのであろう。また同様の類推から『大和本草』の記述が疣贅ではないにしても、結果的に治癒したという事実から薏苡仁の湿に対する効能を引き出して記したものではないだろうか。

結 論

薏苡仁の治疣処方 は山田元倫撰『名家方選』をもって嚆矢となす。

付記 『黄帝内経素問』『妙薬单方』『用薬須知』『本草綱目啓蒙』『農薬全書』『料理物語』は杏雨書屋所蔵、『医療手引草』は聖光園細野診療所所蔵。いずれも同文献の閲覧に對しまして深謝致します。また『ハトムギの効用』は小太郎漢方製薬所蔵で、コピーによる同文献の提供に對しまして深謝致します。更に『臨床薬石新報』は京都府立医科大学図書室所蔵で、同文献のコピーサービスに對しましても感謝致します。

本論文の要旨は第46回日本東洋医学学会学術総会(平成7年6月9日~11日, 金沢)において発表した。

文 献

- 1) 吳崑注: 黄帝内経素問, 第六卷, 九丁表, 出雲寺和泉掾, 宝永三年
- 2) 張仲景著: 新編金匱要略方論, 卷之上, 七丁表, 二十八丁表一裏, 三十一丁表一裏, 卷之中, 三十一丁裏, 出雲寺松栢堂, 享和元年
- 3) 李時珍撰: 新板校正本草綱目, 第二十三卷, 十八丁裏一十九丁表, 発刊者不明, 江戸後期和刻
- 4) 曲直瀬道三述, 曲直瀬玄朔校録: 能毒, 上, 三十

- 八丁裏一三十九丁表, 村上平楽寺, 正保二年
- 5) 穂積甫庵著: 妙薬单方, 三十三丁裏, 書堂松雲齋他, 元禄七年
- 6) 王燾著: 外台秘要(復刻) 上冊, p.629, 国立中国医薬研究所, 1964
- 7) 薛己撰: 外科秘要, 三/薛氏医案, 一/四庫医学叢書, p.763-356, 上海古籍出版社, 1991
- 8) 蘆川桂洲著: 病名彙解, 卷之六, 十八丁裏, 植村藤右衛門, 貞享三年
- 9) 貝原益軒編録: 大倭本草, 卷之四, 十四丁表, 小野善助, 宝永六年
- 10) 寺島良安編: 和漢三才図会(復刻), p.150, 吉川弘文館, 1906
- 11) 三村玄碩編著: 合類広益靈宝薬性能毒大成, 卷三, 三丁表一四丁表, 土川字平他, 正徳五年
- 12) 香月牛山著: 巻懐食鏡, 七丁表一裏, 茨城多左衛門他, 明和三年
- 13) 松岡玄達編: 用薬須知, 卷之二, 十二丁裏, 野田藤八, 享保十一年
- 14) 香月牛山著, 難波恒雄編: 薬籠本草/香月牛山選集, 二, pp.361-364, 漢方文献刊行会, 1974
- 15) 香川修庵著: 一本堂薬選, 中編, 七十二丁表, 文泉堂, 享保十六年
- 16) 吉益東洞著: 薬徴, 卷之下, 五丁裏一六丁裏, 出雲寺文治郎他, 文化九年
- 17) 古川瑞昌著: ハトムギの効用一ガンと美容と長寿にきく一, pp.30-45, 六月社, 1963
- 18) 加藤謙斎撰: 医療手引草, 別録下, 外科, 三十一丁裏一三十二丁表, 浅野弥兵衛, 明和三年一天明四年
- 19) 大塚敬節著: 漢方と民間薬百科/改訂増補, pp.88-89, p.91, p.109, p.126, p.171, p.191, p.220, p.228, p.239, p.246, p.254, p.256, p.278, p.294, 主婦の友社, 1978
- 20) 小泉栄次郎編: 増訂和漢薬考, 前編, pp.338-339, 朝香屋書店, 1925
- 21) 寺尾国平: 薏苡仁の治疣作用, 臨床薬石新報, 第一巻, 第十一号, p.504, 1906
- 22) 古川瑞昌著: ハトムギの効用一ガンと美容と長寿にきく一, p.89, 六月社, 1963
- 23) 片倉鶴陵著: 青囊瑣探, 下巻, 二丁裏一三丁表, 勝村治右衛門他, 享和元年
- 24) 雨森宗真著, 富士川游他編修: 松蔭医談/杏林叢書, 第四輯, p.8, 吐鳳堂書店, 1925
- 25) 山田元倫撰: 名家方選, 三十九丁裏, 浅井莊右衛門他, 天明元年
- 26) 難波恒雄著: 原色和漢薬図鑑, (上), pp.312-314, 保育社, 1984
- 27) 小野蘭山口授: 本草綱目啓蒙, 卷之十九, 九丁

- 表, 林喜兵衛他, 享和三年一文化二年
- 28) 宮崎安貞編録, 貝原楽軒刪補: 農業全書, 卷之二, 四十七丁表, 小川多左衛門, 天明七年
- 29) 寺島良安編: 和漢三才図会 (復刻), p.1442, 吉川弘文館, 1906
- 30) 著者未詳, 塙保己一他編纂: 料理物語/続群書類
- 從, 第十九輯下, 卷第五百六十五/訂正三版, p.368, p.370, 続群書類従完成会, 1957
- 31) 朱丹溪撰: 本草衍義補遺/丹溪医集, p.77, 人民衛生出版社, 1993
- 32) 危亦林編著: 世医得効方, p.147, 上海科学技術出版社, 1991

要旨 薏苡仁は, 往古は不老延寿の薬であった。『黄帝内経素問』には真心脉を薏苡仁に例えて形態の特徴が記され, また『金匱要略』には薏苡仁を含む四処方が記載されている。薏苡仁の治疣作用については, 『本草綱目』や『能毒』にも記載なく, 江戸時代の治疣療法としては艾灸もよく用いられた。薏苡仁の治疣作用を最初に記載した文献は『大和本草』であるとされているが, その病変の記述からは疣贅とは即断できない。従来はその後の『松蔭医談』の薏苡仁の治疣記載を経て, 『青囊瑣探』の治疣神方が最初の治疣処方とされて来た。しかし今回の独自の調査で『青囊瑣探』の20年前に, 山田元倫撰『名家方選』に「治疣方 薏苡三錢甘草一分」という内服のみならず外用にも用いる処方の記載を見出した。治疣作用の発見は恐らくチョウセンムギの菓子としての摂食よりも薏苡飯, 薏苡粥による大量摂取によって著効例を多数経験したことによるものではないかと考按した。

キーワード: 薏苡仁, 治疣処方, 青囊瑣探, 名家方選, 薏苡粥